

ライフヒストリー研究によるマイノリティ社会的包摂への実践

関西大学非常勤講師 玉井眞理子

1. 本研究の目的と意義

ショウはライフヒストリー研究を通して移民マイノリティの社会的包摂を試みた。本研究では、『ジャック・ローラー』（1930）をアメリカ移民史のなかに位置づけることによって、これを示す。本研究の意義は、従来等閑視されがちであった新移民観に焦点をあて、ショウの研究の歴史的意味をマイノリティに対する福祉的支援の観点から明らかにする点にある。

2. 白人移民を分かち眼差しの誕生

世紀転換期におけるアメリカの産業化/都市化は、ヨーロッパからの膨大な移民が底辺労働を担うことにより成し遂げられた。この頃の移民の流入には、出身国および総数において大きな変化がみられ、特に都市における労働市場では移民間での「下への競争」が生じ、出身国に基づく移民の分化が生じた。

移民を旧移民と新移民とに初めて公的に分類したのは、合衆国移民委員会といわれる。この委員会が1911年に公開した報告書には、1820年から1883年までに移民総数の95%を占めていたのは西欧・北欧からの移民であったが、1883年以降は移民の70%以上が南欧・東欧からの移民で占められるようになったと記されている。前者が旧移民、後者が新移民であるが、ここで見逃してはならないのは、新移民に関する次の説明である。「新移民は、旧移民と比べはるかに知能で劣っており、…（略）…人種的にみると、新移民はそのほとんどが英、独そして1880年より前の時期に渡米してきた国の人々と本質的に異なっている」。このことから、旧移民と新移民とを人種的優劣により区別する眼差しが誕生していたことがわかる。

3. 少年のライフヒストリーが明らかにする現実

「生活史三部作」におけるライフヒストリーの書き手は、いずれもスラムの新移民二世であり、『ジャック・ローラー』ではポーランド移民二世スタンレーが書いている。これを読めば、①地域が逸脱を正当化させる価値基準を子どもに与え、②継母がその夫から被る暴力の憂さ晴らしが子どもに向かうために、子どもが「家出常習者」となり、③子どもを支援するはずの少年司法制度が、実は沈黙させ抑圧していた実態を知ることができる。加えて④共感的支援の継続によって初めて、逸脱者の更正がもたらされるのを伺い知ることもできよう。

4. まとめ：移民マイノリティの社会的包摂に向けて

非行少年自身が書いた物語（own story）が紙数の多くを占める『ジャック・ローラー』において、ショウは新移民二世を、血の通った同じ人間として読者の面前に登場させている。そこに詳しく記されているのは、家族と少年司法制度から被る暴力の連鎖のなかで育った少年が逸脱を深化させてゆく過程であるが、たとえ逸脱者のアイデンティティを確立させた者であっても、当事者の自尊心を回復させる等の適切な支援を行うならば、更正しうる可能性についても書かれている。当時の新移民が置かれていた歴史的背景に照らしてみると、ショウのライフヒストリー研究は、非行少年の視点に立つことによってマジョリティの側の認識を変化させ、ひいては移民マイノリティの社会的包摂を推進する実践であったとみることはできるのではないだろうか。

<文献>

玉井眞理子 2013 「米国における子どもの貧困と福祉的支援—クリフォード・R. ショウによる地域福祉の理念と方策」 『教育社会学研究第92集』 pp. 65-82